

## 小林昇文書について（2）

荒 恵子，服部 正治

本稿は『立教経済学研究』67巻4号（2014年3月）掲載の「小林昇文書について」<sup>1)</sup>の続きである。前稿では触れていなかった「ドイツ日記」、研究ノート、書簡ファイル、講義ノートを中心に紹介する。これらには小林の実証を重んずる研究姿勢の生成過程を物語るエピソードが含まれていた。そして、小林を「『経済思想』山系」を登ると評した飯沼二郎によれば、経済思想史の研究は経済理論中心になるが、「小林さんのばあいは、経済理論そのものというよりも、むしろ、そのような思想と、それを生み出した社会との関係が、……さらには、そのような思想を生み出した人間そのものが追求されている。いわば『人間の顔をした』経済思想史なのである」<sup>2)</sup>。この「小林の学風」の由縁を辿っていきいたい。

### 1. ドイツ

#### (1) 「ドイツ日記」(写真1)

小林は「ドイツ日記」と書いた手帳(10.25×10.0cm)に、立教大学から海外研究員としてドイツへ留学した期間の簡略な記録(往路1964年3月23日から帰路12月27日まで)を付けていた。この「ドイツ日記」には、1)東西ドイツのリスト研究者との交流、2)「ドープシュ・パツェルト文庫」、3)「リ

スト文庫」のカード式目録についてなどが記されている。1)と3)については、後で紹介する「LIST - ARCHIV」など研究ノートにも記述がある。

まず、2)の「ドープシュ・パツェルト文庫」購入のいきさつからみていく。

「ドイツ日記」1964年10月12日にはパツェルト蔵書の購入がほぼ決まったこと、リスト文庫カード式目録を撮影したフィルムを受け取ったことが書かれている。「ドープシュ・パツェルト文庫」についての小林自身の解説は、雑誌『立教』37号(1965年)掲載の「ドープシュ＝パツェルト文庫のこと」、5年後の『立教』57号(1970年)「ドープシュ＝パツェルト文庫について」、『Catalogue of Dopsch Patzelt Collection in the Rikkyo University Library / ドープシュ・パツェルト文庫目録』の巻末に掲載された「Dopsch Patzelt 文庫購入の仲介者として」(1971年)の3つが詳しい。また自著『山までの街』にも言及がある<sup>3)</sup>。この文庫購入の経緯について、同僚であった鶴川馨が『小林昇経済学史著作集』(以下『著作集』)4巻月報、「立教と小林昇先生」(1977年)の中で次のように言及している。1962-1963年度に経済学部長を務めた小林は、留学のためにドイツへと向かう。その出発の直前に、東京の書店から鶴川にドープシュ蔵書が売りに出ているという

1) 前稿と同様に本文では敬称を省略する。

2) 飯沼二郎「小林さんの学風」『小林昇経済学史著作集』1巻月報，未来社，1976年。

3) 小林昇『山までの街』八朔社，2002年，22-24ページ。

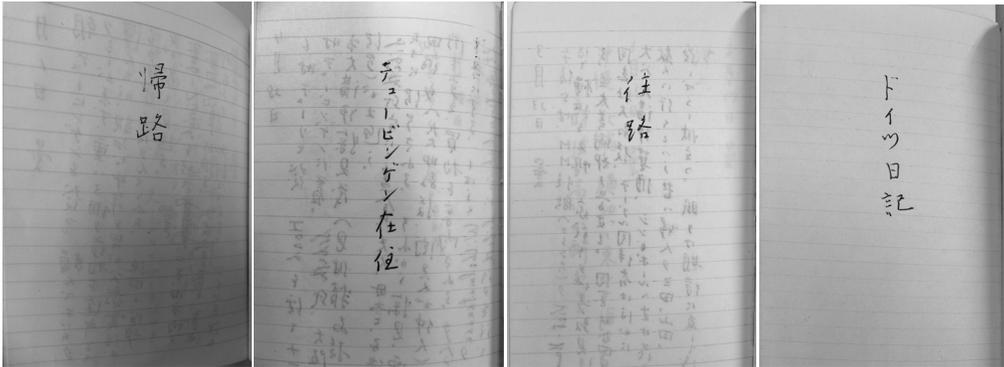


写真1

情報が入った。ドーブシュの愛弟子、エルナ・パツェルト、ウィーン大学教授が「ドーブシュ教授の蔵書をまとめて譲りたいとの希望を持っておられるとのことでした。このことを小林昇先生のお耳に入れると、『ともかくあちらでお目にかかってみましょう』と、また当時の経済学部長田中正義とよく相談しながら、東京の書店と連絡を取るようと言った。「ドイツ日記」にも連絡の記録がある。この逸話をもう少し紹介しよう。

「パツェルトさんの蔵書は、われわれのばあいとまったくおなじに部屋部屋の隅ごとにいろいろな書架に収めてあり、さまざまな話の合間に、あっさりとながらそれらを全部見せていただけました<sup>4)</sup>。蔵書を見にパツェルト宅を訪れた小林は、帰りしなに帰国前に再訪したいとの希望を伝えている<sup>5)</sup>。小林は10月4日パツェルトへ手紙を送っている。10月10日の「Patzeltさんから書信」はその返信と思われる。しかし「ドイツ日記」にウィーン再訪の記録はなく、11月1日帰国の途についている。「パツェルトさんのご都合で」再訪できなかったことが、帰国の翌

年1965年5月25日に書かれた「ドーブシュ＝パツェルト文庫のこと」に記されている<sup>6)</sup>。「正味三時間ほど<sup>7)</sup>」、一期一会であった。こうして1965年の「706冊」、さらに後になって改めて購入が決まった1969年の「270余点」の最終的には「合計1000冊に近い<sup>8)</sup>」蔵書の運命は決まった。「パツェルトさんの好意と決断、本学当局の理解、雄松堂の新田氏の誠意と協力、鶴川教授のお骨折り、この四者が合して<sup>9)</sup>」実現したと小林は謝辞を記している。「ドーブシュ＝パツェルト文庫について」を、ユネスコの仕事で多忙なパツェ

6) 同稿27ページ。稿の終わりに「一九六五・五・二五」と日付が記入されている。

7) 同稿26ページ。

8) 「ドーブシュ＝パツェルト文庫について」22-23ページ。小林はこの稿の終わりに「文中点数と冊数とを混同せざるをえないばあいがありました、お許しを願います」と記している。また、「Dopsch Patzelt 文庫購入の仲介者として」3ページ参照。『ドーブシュ・パツェルト文庫目録』によると、この文庫は、西洋中世史、古代末期から近世にかけての法制史、ヨーロッパ経済史、ドーブシュの岳父ユーリウス・フッカーの旧蔵とパツェルト教授蔵書の政治、経済史、文化史関係資料から成り、洋図書2,380冊、洋雑誌2冊、抜刷資料を含む約1,000点となっている。

9) 「Dopsch Patzelt 文庫購入の仲介者として」2ページ。

4) 小林昇「ドーブシュ＝パツェルト文庫のこと」25ページ。また「Dopsch Patzelt 文庫購入の仲介者として」1ページ。

5) 「ドーブシュ＝パツェルト文庫のこと」26ページ。

ルトだがきつと来日して旧蔵書を見に立教に来てくれるであろう、と小林は結んでいる<sup>10)</sup>。

小林によると、「史学の巨人ドーブシュの存在を私の脳裏に刻み込」んだのは福島高商の同僚増淵龍夫であった。「上原専禄教授の指導のもとにドーブシュを読んでドイツ中世史を学」んでいた増淵は福島高商には一年ほどいて間もなく一橋に戻ったが、増淵をつうじて小林も一橋の上原や増田四郎とも親しくなった<sup>11)</sup>。増淵龍夫訳のアルフォンス・ドーブシュ「初期中世の経済と社会 [1]」は、小林最初の経済学史論文「重商主義の解釋に就いて」とともに1942年1月の福島高商『商学論集』13巻1・2号に掲載されている<sup>12)</sup>。のちになって小林は、「増田教授が立教の図書館で『ドーブシュ・パツェルト文庫』の書棚をまえにして、長い長い時間を過ごされたことも、いまでは忘れえない思い出となった<sup>13)</sup>」と回想している。また、松田智雄もドーブシュについて「徹底した実証主義歴史家」と評している。松田は、東京商大(一橋大学)の上原専禄らは、ドーブシュの実証主義を踏襲し「きわめて精緻な史料批判」に基づく史料編纂をした成果を挙げたといい、さらに「史料学的な性質そのものは大いに模範とすべきものなのですが、しかしまたそれ以上でもないということも明らかなのです」といった<sup>14)</sup>。「徹底した実証主義」と「史料学的な性質」以上の成果を松田は問うのだった。その松田は小林を立教大学に自身の後任として呼んでいる。

10) 「ドーブシュ=パツェルト文庫について」23ページ。

11) 『山までの街』22 23ページ。

12) 『商学論集』13巻1・2号 紀元二千六百年記念、1942年1月、福島高等商業学校。

13) 『山までの街』23 24ページ。

14) 松田智雄「私の学問形成：戦前」住谷一彦・和田強編『歴史への視線：大塚史学とその時代』日本経済評論社、1998年、59 60ページ。

さてドーブシュ・パツェルト文庫について、鶴川は、「ドイツ中世史研究を志す者には垂涎の的」であるこの文庫を招来されたことは「広く我が国の西洋史学に対する貢献」であると述べている<sup>15)</sup>。小林自身も、1964年ドイツ留学中テュービンゲンの教授たちに、出所を秘してパツェルトが作成した蔵書リストを見せたところ「つよい羨望を示された記憶も、まだ薄れていない」と語っている<sup>16)</sup>。また、小林の立教大学退職当時の経済学部長山田耕之介によると、小林は研究にとって充実した図書館の重要性をことあるたびに力説していたが、実際に「西洋経済史の泰斗アルフォンス・ドーブシュ教授の蔵書」収納という実践をしたこと、さらに「本学海外研究員として西独チュービンゲン大学に赴かれた際、リスト文庫(ロートリンゲン市)に通われて作成された龐大なカードを本学図書館に寄贈[し]……ながく記念さるべき貢献をなさいました<sup>17)</sup>」と記している。リスト文庫カード式目録についての小林の解説は、「リスト文献とリスト文庫<sup>18)</sup>」にある。半世紀前にリスト文庫カード式目録が収納された当時の立教大学図書館とは、1960年に建てられた池袋図書館本館あるいは経済学部図書室ということになる。しかし、現在収蔵は不明である<sup>19)</sup>。

また、上述のものとは別のリスト文献目録の複写を「小林昇文書」が保管している。

15) 「立教と小林昇先生」『著作集』4巻月報。

16) 「ドーブシュ=パツェルト文庫について」22ページ。

17) 山田耕之介「小林昇先生記念号によせて」『立教経済学研究』36巻3号 小林昇教授記念号、1983年、i ページ。

18) 小林昇「リスト文献とリスト文庫」『立教経済学研究』19巻2号、1965年、『フリードリッヒ・リスト論考』未来社、1966年に収録、『著作集』8巻、1979年に再録。

19) 今回、立教大学図書館に資料確認を依頼したところ、登録はなく収蔵されていないということであった。

「リスト文献/Deutsche Bibliothek/Leipzig」と書かれた封筒に、「B. Werke Friedrich Lists」と見出しのある、360ページから414ページまでの計55枚のA4版の複写が入っている。小林は、『フリードリッヒ・リスト論考』で以下のように述べている。「こんにちのわれわれにとってともかくも有用な、リストの新しい研究文献としては」ライプツィヒのDeutsche Bibliothekに備えられているカード状の「目録が唯一の標準的なものである。」「水田洋教授がコピーを取寄せられ、現在わたくしが保管を托されている」。この目録にはリストの著作も含め合計273点が記載されているが、「この目録の作成および補充の基準については、……若干の疑問も残る」<sup>20)</sup>。

こうした文献、資料を追求するためのその時代時代の最善の努力、そして文献や資料の制約にひとときわ苦労した世代の惜しめない努力の跡は、次に紹介する研究ノートの筆写にもあらわれている。

## (2) 研究ノート (1964年在ドイツ)

‘LIST - ARCHIV / Tübingen Universität’,

‘LIST - ARCHIV’,

‘Tübingen Universität / Stadtarchiv Reutlingen / Stadtarchiv Kempten’の3冊があり、これらはすべてA4版の大学ノートである。

‘LIST - ARCHIV / Tübingen Universität’,

ノート上部に「リストの手稿は1/5が印刷されたのみ」とメモ書きがある。「Fasz. 1 - 39」筆写とメモが続く。

ノートの後ろの5ページには5月4日から6月8日までの日記が書かれている。5月4

日にリスト文庫に初めて行き、8日から「本式に読」み始めたと記され、また地元紙や放送局の取材についての記述もある。5月6日にチュービンゲン大学法経学部長のクローテンに会った際に、リストを通じてドイツ経済史の本質を知ろうとする小林の方法に対して、クローテンは、リストは失敗者で経済理論を実現しなかったのだから無理である、と言ったように思うと小林はクローテンの言葉を記している。小林の「リストの記念祭」(1964年)には次のような記述がある。学部長室で会った時の彼は「こんにちにおけるリスト研究の意義を重んじないような口ぶりであったのに、その後わたくしをリスト協会に紹介してくれた」。また7月4日のリスト生誕175年記念の式典でクローテンは、リストを冷遇したチュービンゲン大学を弁護しつつ同時にリストを讃えるような式辞を述べた。なぜ彼が変わったのかその経緯が分からないので、リスト協会への入会は断った、と<sup>21)</sup>。しかし、クローテンが紹介してくれたことでザリーンの手紙の交換は始まり、ザリーンは小林にリスト協会入会申込書を送っている。

5月11日、リスト文庫のシュヴァルツの捕虜体験を聞いている。小林は「ドイツ文草稿」をシュヴァルツに見せ、シュヴァルツもリストはKartoffelbauerにつき誇張した、Kartoffelは三圃制の1/3の部分にしかすぎなかった、などのコメントを言っている。この「ドイツ文草稿」とは、その前身である「歴史派経済学の父リスト」(大河内一男編『経済学を築いた人々』青林書院新社、1963年、所収)からリストの略伝を省き、そのドイツ訳をタイプで打った原稿のことである<sup>22)</sup>。こ

21) 「リストの記念祭」『書齋の窓』127号、有斐閣、1964年、『著作集』8巻、327-328ページ。

22) 小林昇「在りし日のリスト研究者たち」『東西リスト論争』みすず書房、1990年、42ページ。また、『著作集』8巻、252-253ページ、504ページ参照。「歴史派経済学の父リスト」は『フ

20) 『フリードリッヒ・リスト論考』180-181ページ、『著作集』8巻、276ページ。

の「ドイツ文草稿」はのちの「リストの政治経済学体系小論」(『著作集』8巻, 1979年)の主要部分となる。さらに、小林がケンプテンの実情を見たいと言うと、シュヴァルツは大いに結構だと答え、夏に車で Pfullingen の土地整理を見せてあげようと言った<sup>23)</sup>。シュヴァルツの運転で「ロイトリンゲン近傍の」<sup>24)</sup>大きな酪農施設を見に行ったら、と10月9日の「ドイツ日記」に記されている。

‘LIST - ARCHIV II’

‘R. A. / Fasz. 1.’ と書き始まり、リスト文庫カード式目録などの資料を筆写している。カード式目録(写真2)は『著作集』8巻302ページに掲載されている。また、このノートの後ろの3ページには7月3日から23日までの日記が記されている。

7月4日、昨夜 Prof. Gehring は、農村の変化はやはり今次大戦後のことであると話していた。また、はじめて Prof. Sommer に会い、小林の「ドイツ文草稿」を渡して読んでくれることを頼んだ。

7月 [原文ママ] 日、Prof. Sommer からの手紙には、1) J. Möser の引用の評価の点で私と決定的に違うこと、2) 零細農の問題は当時のドイツの重要問題ではなかったこと、3) リストをナチスが利用したのではなく、リストをナチスは学閥に付したが彼を焔から守ったのはリスト協会であること、等の評言が書いてある。小林は必ずしも首肯しないと記している。この点については次の書簡ファイルでも触れる。

7月 [原文ママ] 日、ゾンマーの手紙を

リードリッヒ・リスト論考」に再録されている。

23) Kartoffelbauer は「貧困・無知・因習的な『ジャガイモ百姓』」、小林昇「フリードリッヒ・リスト」水田洋・玉野井芳郎編『経済思想史読本』東洋経済新報社、1978年、115ページ参照。Pfullingen はシュワーベンの都市。

24) 小林昇「『東西リスト論争』新考」『日本學士院紀要』61巻2号、2007年、87ページ。

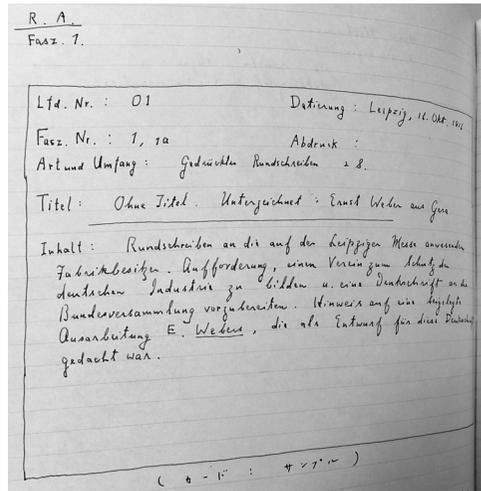


写真2

シュヴァルツに見せると首をかしげる。しかし、Sommer 氏は戦争中にナチ反対者として一時拘禁されたこと、また Prof. Salin はユダヤ人として Basel に移ったこと、等を知らせてくれた<sup>25)</sup>。

7月13日、リスト文庫カード式目録は8月上旬に大体タイプできるはず。夜、数日来書いておいた Prof. Sommer への返信の清書をする。

7月22, 23日、小林がシュヴァルツに師ゲーリンクの「描くリストの父の生業の農業」について尋ねると、シュヴァルツの答えは次のようであった。彼は生計の必要上農業を行った。彼は農業の面では Selbständiger Bauer。これは Grundherr とも、一般の Bauer (人格的にのみ frei) とも違う。ヴュルテンベルクの農民解放はもとの重い Obereigentum を必ずしも変えず、大きな変化はこの大戦後に起こった。ロイトリンゲンを一例にあげると Stadtbürger は古く15世紀から封建領主・僧院とともに近在に土地を所有し、それがだいにロイトリンゲン近隣に集中した<sup>26)</sup>、と。

25) 『東西リスト論争』44ページ参照。

26) 『著作集』7巻、1978年、242-243ページ参照。

‘Tübingen Universität / Stadtarchiv Reutlingen / Stadtarchiv Kempten’ このノートは主に以下の3部構成で、日記は含まれていない。

(1) ‘Mitteilungen der Friedrich List Gesellschaft e. V.’ Nr. 1 と書き始まり、筆写が続く。これはフリードリッヒ・リスト協会の「ごく質素なパンフレット」体裁の機関誌(1926-1936年)である。リスト協会については「リスト文献とリスト文庫」に言及がある<sup>27)</sup>。

(2) Tübingen Blätter / 49. Jahrg. 1962 と書き始まる計7ページの筆写。10月19日の「ドイツ日記」では、ジェームズ・ステュアートについての記事の載っている Tübingen Blätter をはじめて見た、「半分迄筆写」と記してある。10月19日から21日テュービンゲン大学図書館に通い、この21日には経済史担当のボルンを訪ね、抜刷をもらっている。

(3) 資料の筆写。「Kemptenの Stadtarchivar: Friedrich Zollhoefer 氏による。」というメモ書もある。

ロイトリンゲン市のリスト文庫では、手書きのカード式目録全てを、タイプで活字に打ち直す作業が行われていた<sup>28)</sup>。活字になったカード式目録を写したフィルムを受け取ったのが1964年10月12日、パツェルト蔵書の購入がほぼ決まったのも同じ日であった。

次に、書簡を収容したクリアファイルを参照しつつ、1) の東西ドイツのリスト研究者との交流について概略を記す。

### (3) 書簡ファイル 15冊 (ドイツ関連は8冊)

クリアファイルに収容された書簡は、主に

27) 『フリードリッヒ・リスト論考』187ページ、また、『著作集』8巻、282ページ。

28) 『フリードリッヒ・リスト論考』209ページ、また、『著作集』8巻、302ページ。

東西ドイツのリスト研究者、リスト文庫関係者、ドイツの知人、そしてグラスゴウ大学のアンドルー・スキナーからのもので、スキナーと水田洋の書簡と一緒に保管されているファイルもある。また、クリアファイルには書簡だけではなく、同封されていたと思われる抜刷や書評、新聞記事などの印刷物、また名刺を収納したものもある。前稿でも触れた小林の訪来を報じたロイトリンゲン市の地元新聞の記事もある。

8冊あるドイツ関連書簡ファイルの一部を人名別に紹介する。ファイル「フリードリッヒ・リスト」はファイルに付いたラベル「フリードリッヒ・リスト」から仮に付けたものである。このファイルには、1964年のリスト生誕175年記念祭関連の書簡が1963年の日付以降から収容されており、最も古くまた厚いファイルである。このファイルには『著作集』6巻に掲載されたクフシュタインの写真と同じアングルでやや左側に寄った写真がはさんである。また、他のファイル名は最初に収容されている書簡の年と名前を、たとえば「1972ザリーン」と仮に付けた。以下ではファイルに入っている書簡の順に、書簡の日付を記す。

#### i) ザリーンからの書簡 11通

ファイル「フリードリッヒ・リスト」: 1964年5月19日1枚、「ドイツ日記」に5月21日 Prof. Salin より書信があり、Prof. Kloten の紹介による、と記されている。1964年7月27日1枚、1964年6月8日2枚の3通。

ファイル「1971ザリーン」の最初に1971年2月3日1枚、次に1971年4月15日1枚、日付がない2枚目のみで、「お1葉?」とメモがある。1971年1月19日1枚、1972年5月17日1枚、1974年5月ザリーンの訃報までの6通。さらに、ボルン、レンツ、ゾンマーからの書簡が続く。

ファイル「1972ザリーン」の最初に1972年6月19日1枚と、次に1974年9月妻イサマリ

アの訃報の2通がある。さらに、次にはシュヴァルトツからの書簡1976年9月6日、レントツ1975年12月7日、スキナー1981年7月28日、ホランダール1979年11月25日、1980年1月7日、ヴェンドラーの書簡がある。このファイルの中に1987年3月パツェルトの訃報が保管されていた。その訃報の封筒に、宛名の字 Kobayasi が故パツェルトの字体と似ていて驚いたと小林が書き添えている。また、鷓川が遺族に送った御悔みの書簡も同封されていた。

#### ii) ゲーリングからの書簡

1964年7月3日のリスト生誕175年記念祭の宴席で、ゲーリング夫妻と席が隣であったことを、小林は幸運だったと語っている。小林にとっては「未見で未知だった老教授」であったが、すでに松田智雄はパーデン＝ヴュルッテンベルクの経済史担当<sup>29)</sup>のゲーリングの指導を受けていた。ゲーリングは出来上がったばかりの自著『若きリスト』を、その記念祭の宴席で受け取っていた。同書はリストがヴュルッテンベルクに住んでいた時期を主とした伝記である<sup>30)</sup>。のちに小林はこの書評を書き、そのドイツ訳タイプ原稿をゲーリングに送っている。小林はこの書評の翻訳を池田芳一に依頼した。二人は1964年にチュービンゲンで出会い親交を深めていた<sup>31)</sup>。この『若きリスト』書評のドイツ訳タイプ原稿は加筆修正がされており、「小林昇文書」に保管されている。

ファイル「1967ゲーリング」1冊にゲーリングからの書簡が収容されている。収容順に書簡に記された日付を記す。

クリアファイルの1通目1967年8月15日付書簡は『著作集』8巻501ページに掲載され

ている。リスト『農地制度論』に対する小林の「評価に『とくに関心をひかれる』」、また、「リストはマルクスの源泉の一つであった」という小林の主張をゲーリングはつよく支持した、と記されている<sup>32)</sup>。

2通目1967年11月4日。3通目1968年2月20日付書簡の3枚中2枚目のほぼ半分を訳出した部分が『東西リスト論争』56-57ページにある。4通目1968年10月1日、5通目以降には1965年7月5日から1970年8月の訃報までが含まれている。

#### iii) ファビウンケからの書簡 3通

ファイル「1965シュヴァルトツ」：1957年9月5日両面2枚、1957年6月14日1枚、1958年7月23日1枚の3通。次のリュウレからの書簡1958年8月7日2枚でファイルは終わる。その他はすべてシュヴァルトツからの書簡。また、ファビウンケ宛などの書簡の下書き3通がクリアファイルの後ろのポケットに入っている。

『東西リスト論争』185ページで言及されている1989年6月5日と10月6日のファビウンケの書簡はファイルにはない。10月6日の書簡に同封されていた抜刷2冊は別のクリアファイルに収容されている。抜刷‘Zum 200. Geburtstag Friedrich Lists’ (1989年) に「AV [農地制度論] 間接的に一箇所のみ」、また抜刷‘Zum Politische Ökonomie Verständnis Friedrich Lists’ (1989年9月14日) には「AV への言及なし」と記されている。抜刷の次に収容されているのは小林の書簡の

32) 「ステュアート・スミス・リスト」『著作集』5巻、1977年、485ページには、「リストはマルクスの源泉の一つであったことを推測することはゆるされるであろう」と記されている。また、『著作集』8巻、501ページでは、ゲーリングは「わたくしが『リストもまたマルクスの想原の一つであった』とする、『ステュアート・スミス・リスト』の結語を、この意味でつよく支持されたのであった」と記述されている。

29) 『著作集』8巻、233ページ。

30) 「『東西リスト論争』新考」86ページ。

31) 『著作集』8巻、501ページ。また、池田芳一「『必然』の出会い」『著作集』6巻月報、1978年参照。

下書きと思われる。その次にはヴェンドラーからの書簡が続く。

また、他にもファピウンケの抜刷があり、後でとりあげるドルンのバインダーにファピウンケの抜刷（1955 / 56年）2冊がはさんである。‘Der allgemeine Charakter und die Entwicklung der politischen Ökonomie in Deutschland vor Karl Marx und Friedrich Engels’, ‘Friedrich Lists, nationales System der politischen Ökonomie ein bürgerlicher Beitrag im Kampf um die Schaffung der deutschen Nationaleinheit’. 2冊ともに小林への献辞と「5. 9. 57」の日付が鉛筆で記されている。『著作集』8巻175-177ページにこれら2冊の言及がある。

#### iv) ツオルヘーファー 6通

彼は、小林が1964年7月下旬に訪問したケンプテン市の文書館司書である。小林は、「帰国後同氏から幾冊かの文献をいただくという幸運を得」たこと、ケンプテンの『農地制度論』にゆかりの深い土地を実見したことによって、論稿「オーバーシュワーベンの『土地整理』」は「かるうじて生まれ」た、とする<sup>33)</sup>。一例が「小林昇文書」にあるハンス・ドルンの論文‘Die Vereinödung in Oberschwaben’である。これは「オーバーシュワーベンの『土地整理』」(1972年)の中で「最近……原論説の掲載誌を贈られ」<sup>34)</sup>たと記されている。掲載誌(1901~1904年)のドルン論文のページのみがあり、通しページ(計114ページ、114ページのみ白紙)が鉛筆で加筆してある。このバインダーには「土地整理の実績を示す詳細な付図」<sup>35)</sup>5枚が入っており、地図に記載された年をとじられた順にあげると、1902, Plan (1793) Plan 1902, 1818, 1818の4枚で、またケンプテン

を中心とした地図(1814<sup>36)</sup>)1枚がはさんである。すでに小林は1904年刊行のドルンの著書を使っていた。ツオルヘーファーは最晩年まで小林を気づかっていたことが伝わるエピソードである。小林はこのドルンの著書を「こんにちでもこの問題についての基準書とされているようである」と記している<sup>37)</sup>。また、先述のファピウンケの抜刷2冊(1955 / 56年)はこのバインダーにはさまれていた。

書簡はクリップでとじられており、クリアファイルには入っていない。とじられた順に、書簡の日付を記す。

1971年8月15日 A4 1枚, 1971年3月12日 A4 1枚, 1971年5月12日 A4 2枚, 1964年8月12日 A4を縦に1 / 2 1枚, 1964年7月24日 A4を縦に1 / 2 1枚。ファイル「フリードリッヒ・リスト」に訃報(1975年11月)と同封されたケンプテンの小さな地図が入っている。

v) シュヴァルツからの書簡 1964年12月10日(ファイル「フリードリッヒ・リスト」)から1985年8月20日(ファイル「1972ザリーン」)。

最も多い書簡は「リスト文庫」主任のシュヴァルツからのものである。シュヴァルツは中世の農業史が専門の地方史家であり、「リストについての有力な書かざる専門家である。」<sup>38)</sup>ほとんどの書簡はクリアファイルに入っているが、資料と一緒にとじてある書簡もある。シュヴァルツはゲーリンクの教え子の一人であり、リスト関連の資料や事実の発見に彼は関わっており、師ゲーリンクの研究に貢献したと小林はいう。また、小林は23歳年下のヴェンドラーを知らなかったが、連絡をとるように勧めたのはシュヴァルツである。小林帰国後のことであった<sup>39)</sup>。シュヴァルツ

33) 『著作集』7巻, 442, 393ページ。

34) 同書 398ページ。

35) 『東西リスト論争』52ページ。

36) 1814の4は不鮮明。

37) 『著作集』7巻, 298ページ。

38) 「リストの記念祭」『著作集』8巻, 325ページ。

39) 『東西リスト論争』新考』88ページ。また、

の小林に対する理解と支援は長きに渡り、大きなものであった。1989年5月、病床のシュヴァルツを見舞った時の小林の沈痛な思いが記されている<sup>40)</sup>。

vi) ヴェンドラー

ファイル「1972ザリーン」：ヴェンドラーからの書簡1985年10月5日、この書簡の前にシュヴァルツからの1985年8月20日付けの書簡がある。ヴェンドラーの字が読みにくいいためか筆写が同封してある。1986年11月28日までの書簡が入っている。

ファイル「リスト1989」：ヴェンドラーからの書簡1990年1月29日はがき大両面1枚、ヴェンドラーへの小林の書簡の控え1989年5月15日、宛名なし日付なしの小林の書簡の下書き、シェフォールトへの小林の書簡の下書き1989年7月18日、宛名なし小林の書簡の下書き1989年8月16日、ヴェンドラーへの小林の書簡の下書き1989年8月31日、宛名なし日付なし小林の書簡の下書き、ヴェンドラーへの小林の書簡の下書き1989年7月2日、ヴェンドラーへの小林の書簡の下書き1989年5月11日と、Noboru Kobayashi 'Forschungen über Friedrich List in Japan'<sup>41)</sup> 抜刷2部が同封されている。

また、ヴェンドラーの立教大学での講演(1993年5月20日) 関連の資料も「小林昇文書」に保管されている。

vii) ゾンマーからの書簡

ファイル「1971ザリーン」：1964年7月7日付、上述の「ドイツ文草稿」にゾンマーが書き込みをして小林に返した時に、さらに手紙も送ったというもの。「その書体はかなり読みづらい」<sup>42)</sup> ため、隣に小林の筆写と思わ

れる手紙がある。小林純によると、「添え書きの返書にあたるようである。ただ、『東西リスト論争』新考』85ページ下段での4点にわたる指摘のうち、返書では、第2, 3, 4点については明示されている」ということである<sup>43)</sup>。

viii) ボルンの書簡

ファイル「1971ザリーン」にあるボルンの最初の書簡は1977年11月15日で、これは1967を1977と修正したように見える。収容順に、1971年5月9日、1969年1月15日、1972年6月24日各1枚。

小林は1964年7月4日式典の後「ボルン教授の研究室を再三訪れ」ている<sup>44)</sup>。その際、上述の「ドイツ文草稿」の中の一語、晩年の「リストの nationalistiche Ökonomie」という、この末尾のところの表現は、nationale Ökonomieと改めさせてもらえませんか」とボルンにいわれた<sup>45)</sup>。ボルンは「わたくしとの会話(1964年)のみに、この点をけっして認めようとしなかった。」<sup>46)</sup> この一語修正の上でドイツ誌に掲載したいというボルンの申し出を小林は固辞している<sup>47)</sup>。また、1964年10月21日の訪問の際には、テュービンゲン大学のボルンの研究室に海外研究者としてドイツへ留学していた日本人研究者も同席していた。

『東西リスト論争』で小林が述べているように、東西ドイツの研究者たちは現地に住むがゆえの知識や利便性よりも、東西分裂の弊害を長きにわたり多くこうむっていた。地元

43) 同書42 45ページ参照。

44) 同書46ページ。

45) 「あなたの表現がいまのドイツでもつ意味[超国家主義的経済学という意味]はおわかりでしょうね、同ページ。また『著作集』8巻、171ページでは「リストの国粋主義的反動面」と記されている。

46) 『著作集』7巻、322 323ページ。同8巻、331ページも参照。

47) 『東西リスト論争』46ページ。

『著作集』11巻、1989年、400ページ参照。

40) 『東西リスト論争』61 62ページ。

41) 小林昇 'Forschungen über Friedrich List in Japan' 『経済論集』46号、大東文化大学、1988年。

42) 『東西リスト論争』44ページ。

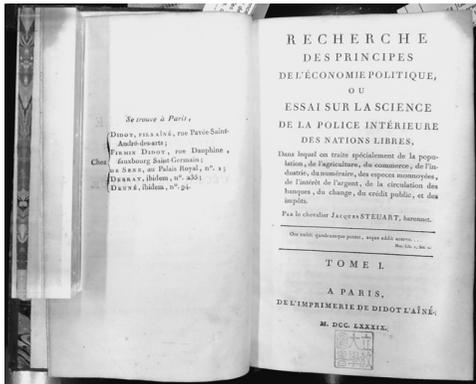


写真3

であるがゆえに実証主義を貫徹できるはずが、リスト研究自体が分裂、対立をよぎなくされていたのである。しかし、1964年ドイツ滞在の半年によって、日本にいたままでは決して体験できなかったものを小林は感得したはずで、それは当時小林自身が自覚していたよりも深いものであったろう。たとえば、ゾンマーの激昂についてシュヴァルツに率直に聞いたこと、そしてシュヴァルツの誠実な対応は小林にはかけがえのないものであったろうし、また、リスト研究自体の東西分裂をまのあたりにすることで、小林に、冷静な研究の重要性を痛感させ、『農地制度論』は自分が解明しなければならないと再認識させたであろう。文献実証はその文献の背景全体の理解が問われるが、一個人の力ですべてを読み尽くすことは困難である。1964年ドイツでの出会いをなくして、小林はのちの小林になれたであろうか。無論、ドイツだけではなく。多くの人々から寄せられた抜刷、資料など、「小林昇文書」にさまざまな品々がある。

一例を記せば、写真3のジェイムズ・ステュアート『経済学原理』第1巻(1789年)パリ版初版本は、水田洋がアヴィニョンで購入した稀覯書。2014年5月に立教大学新座キャンパスで開催された経済学史学会第78回大会において、小林昇文庫の貴重書の一部を展示した際に本の由来が明らかになった。

次に、小林の研究の出発点である戦時下の福島高商と講義ノートについてとりあげる。

## 2. 福島

### (1) 文献の制約

小林は、赴任「当時の福島は、戦争中でもなんとか学問の道に進もうという連中の吹きだまりのようなものであり、……西洋経済史のゼミナールを出ていながら経済学史の畑を耕すようになったのは、もっぱら文献の制約の結果である」と記している<sup>48)</sup>。また小林は、「福島高商の図書室には、西洋経済史についての外国語の研究文献や資料集は、いな概説書さえも、まだまだ極めて少なく……外国書の輸入もすでにむづかしくなっていた」ため、西洋経済史の重商主義やリストを学びはじめていたので、経済学史に分野を限ろうと思ったと回想している<sup>49)</sup>。経済史担当の増淵が一橋に戻った後、小林も藤田五郎も経済史を担当しようと、お互いどっちの方が適任かと言い合ったと小林はいう<sup>50)</sup>。また、熊谷尚夫は「最初の担当課目は藤田が商品学、増淵が市場論、小林が植民政策、私が生命保険論といったところで、私たちがそれぞれに研究を志していた専門領域とは関係がなかった<sup>51)</sup>」と回想している。当時の福島高商図書室の蔵書数について、1941年の『信陵時報』は、和書20,000冊、洋書9,000冊、その他3,000冊、計32,000冊(1941年10月末)であり、「全国高商中、……決して上位にあるものではあるまい。重要なのはその質的方面である

48) 小林昇「この道二十五年 出発のころ」『立教』43号、1966年、26ページ。

49) 『山までの街』24ページ。

50) 同上。

51) 熊谷尚夫「心地よい雰囲気」、Scrap book に貼ってあるこの切り抜きには「原題は『古菓の仲間』/61年2月18日/日経新聞」と加筆してある。

が、決して無条件には誇り得ないことを素直に認めねばなるまい<sup>52)</sup>と報じている。当時小林は、「私の武蔵高校時代に倫理学の教師であった(異色の?)西洋古典学者の小川政恭先生が図書館員として勤務して」<sup>53)</sup>いた東北大学から、「フリードリッヒ・リストの全集などをぼつりぼつりと借り出してきては筆写をつづけることができたので、学史の研究ならばなんとか進められたのである」と記している<sup>54)</sup>。小林は東北大学のある仙台に何度も通い、このことを小説にして同人誌『狼煙』に載せている。また、小川も『狼煙』に寄稿している。

小林の蔵書については、1954年の新聞『福島民友』の記事「書斎拝見」に次のように紹介されている。「ギッシリと三千冊：自分の著書は自ら装幀」という題で、「福大経済学部教授小林昇氏」の自宅の書斎は「約三千冊の本がギッシリ部屋の両側と別室に立ち並んでいる。見わたしたところ世界文学全集、小槻全集、万葉集大成、鷗外全集、茂吉全集、国訳漢文大成と全集ものがほとんどでしかも専門の経済学説史の本はまだら。」「『専門書は大学の研究室に置いてある……主に戦後買ったもの』ばかりだそうだと<sup>55)</sup>。ちなみに、「『国訳漢文大成』ですとか『続国訳漢文大成』……『国訳大蔵経』……父は、そういうもの

をどんどん買い込みましてね。……自分のために買い込んでいましたね<sup>56)</sup>と小林は回想している。また、高校時代から「日本文化史に興味を持ち、国史か国文学に行きたいと願っていた。……いま思えば、父親がいたら『好きな道を択べ』とってくれたことだろう。社会の問題にはどの専門からでも迫れる。わたくしの選択は十分自主的ではなかった<sup>57)</sup>とも小林は回想する。これらの蔵書は小林昇文庫に収容された<sup>58)</sup>。

また、他にも文献不足から起きた問題があった。前稿でもふれた「小林昇文書」にある3校ゲラである。その布張りの表紙には‘Fr. List und der Merkantilismus’ と記された手書きのラベルが張っており、中扉には「フリードリッヒ・リストと重商主義 リストの生産力論の學史的的位置と類型とに關する一試論」と題が印刷されている。その中扉にある「三校ノ東光印刷株式會社」の印の中に3月30日と日付が記入されているが年次はなく、「フリードリッヒ・リストの重商主義」と加筆されている。この3校で出版を断念したエピソードは『著作集』6巻(1978年)465-467ページで語られているが、出版社の「学生書房」の名はゲラにはない。3校の段階で出版を断念したのは、原典確認の必要からであった。その後小林は、一橋大学で *British Merchant* (ed. by Charles King, 1721) を読み、「リストと重商主義」(『フリードリ

52) 「圖書課より」『信陵時報』2号、1941年、福島高等商業学校信陵報国情報班、189ページ。また、同誌には小林の「日本の詩心について」が掲載され、さらに、61ページには、航空研究班と芸道班の班長「小林教授」、また小林は庭球班と経済研究班では参事であると記載されている。ちなみに庭球班班長は「中村[常次郎]教授」、経済研究班は「熊谷教授」。

53) 『山までの街』24ページ。

54) 「この道二十五年 出発のころ」26ページ。

55) 「福島民友29. 11. 21」と加筆してある。「以前外人教授のために立てた洋館作りの家に畳を入れたコタツのある部屋が書斎。」コタツの上の本を上げた小林の写真が載っている。

56) 『先学訪問 小林昇編～21世紀のみなさんへ～08』『学士会会報』別冊、社団法人学士会、2007年、10ページ。

57) Scrap book に貼ってあるこの切り抜きには「新日本出版社『経済』1978. 5. No. 167 / <大特集> 78年版 経済のすすめ」と加筆してある、206ページ。

58) 再版『國譯漢文大成』國民文庫刊行會編輯、國民文庫刊行會、1921年。『續國譯漢文大成』、國民文庫刊行會編輯、國民文庫刊行會、1928-1931年。再版『國譯大蔵経』國民文庫刊行會編、國民文庫刊行會、1917-1928年。

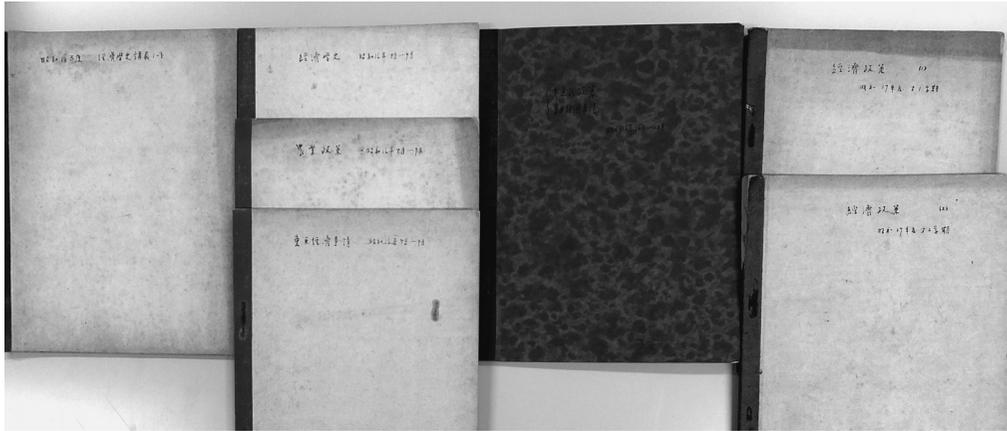


写真4

ッヒ・リスト研究』日本評論社、1950年、所収。『著作集』6巻に再録)を書き上げている。このゲラの目次の「二 リストにおける重商主義の文献」には「リストと『ブリティッシュ・マーチャント』」と書き込みがあり、ゲラ全体も加筆修正されている。

#### (2) 講義ノート<sup>59)</sup>

福島高商に赴任した当初の、小林の戦時中の講義ノートが7冊残っている。(写真4)各ノートについては、ノートに記述された見出し、また見出しのない場合は書き始めを掲載した。旧漢字、略字はノートの字体になるべく近づけた。手書きであるため判読の難しい文字があり、それは で表した。また、小林は右側ページにのみページ数を記入し本文を記述している。左側ページは空欄が多いが、メモや年表の記入もある。左側ページの記述の一部を掲載した。

#### i) 1940年「昭和15年度 経済学史講義ノート」(計23ページ)

序説。重農学派としての国民経済学の成立。

2ページ

序説。経済学ノ前史 4ページ

第一章 古典学派成立ノ前提。11ページ

第二章 重農学派 13ページ

第三章 古典学派 (1) Adam Smith

a) 序説 18ページ

b) 國富論ノ構造。21ページ

#### ii) 1941年「経済学史 昭和16年4月 9月」(計20ページ)

緒言。1ページ

第一章 重商主義。2ページ

第二章 重商主義の崩壊と古典学派の諸前提の成立。9ページ

第三章 重農学派 (Physiocrats, Physiocracy) - François Quesnay を中心として。16ページ

#### iii) 1941年「東亜経済事情 昭和16年4月 9月」(計23ページ)

序説。1ページ

第一節 支那社会ノ基礎的概観。3ページ

第二節 欧洲資本主義の支那への侵入。5ページ

第三節 支那ノ農業 8ページ

59) 前稿では「戦前講義ノート」と表記したが、「講義ノート」と改める。

- オ四節 支那ノ工業 17ページ
- オ五節 支那に於ける列国の資本。 19ページ
- iv) 1941年「農業政策 昭和16年4月 9月」(計23ページ)
- 序説。
- (1)「政策に関する学問が……」 2ページ
- (2)「現時に於て……」 3ページ
- (3)「日本の農業はその規模……」 4ページ
- オ一章 日本資本主義に於ける農業 歴史的概観。
- (1)「徳川時代……」 6ページ
- (2)「封建主義の土地制度……」 8ページ
- (3)「地租改正……」 10ページ
- (4)「零細経営……」 12ページ
- (5)「我が国の資本主義工業……」 14ページ
- オ二章 我が農村に於ける土地所有の特質
- (1)「序説の(3)に於て……」 18ページ
- (2)「地主的土地所有の反面としての小作制度は……」 19ページ
- (3)「上述せる如き零細土地所有は……」 20ページ
- (4)「事变直前迄の農業政策の課題は……」 22ページ
- v) 1941年「植民政策, 東亜経済事情 昭和16年10月 12月<sup>60)</sup>」(計18ページ)
- オ一節 斯学ノ対象 1ページ
- (1)「従来の植民學は, 各種の補助學とした行政學であった。……」
- (2)「現在の植民學の課題は廣域經濟論である。……」
- (3)「対象を局限した植民學は……」
- (4)「廣域經濟論の問題とは……」
- オ二節 植民學に属する二, 三の概念に就いて。 2ページ
- (1)「植民現象は, 植民學の変化に拘らず……」
- (2)「植民現象の本質的内容は……」
- (3)「植民現象の普遍的特質として……」
- (4)「植民地といふ言葉は……」
- (5)「外地は内地よりも經濟的發展段階が低位にある。……」
- (6)「上述の問題は, 所謂半植民地の問題を惹き出す。……」 3ページ
- (7)「植民學なる言葉は, 植民政策學と必ずしも同一でない。……」
- オ三節 植民史概説 16世紀以後 4ページ
- (1)「近世社會を發展せしめる要因……」
- (2)「スペインの植民活動は, 銀の直接的な獲得をその目標とした。……」
- (3)「オランダの植民地は, 仲介貿易の一つの極を形成した。……」
- (4)「イギリスに於ては, 植民活動は國家の經濟的竝に軍事的獨立の確保を目的として行はれたものといふべく, 多少とも綜合的に計畫的な意図に従ったものである。……」
- (5)「北米合衆國の獨立は旧植民地制度の崩壊を意味する。……」 5ページ
- (6)「北米合衆國の獨立後間もなく英國は濠洲(1788)及び崑望峰植民地(1795)を獲得し, オ二次の帝國としての發展を開始した。……」
- (7)「諸國に於ける産業革命。……」 7ページ
- オ四節 オ一次大戰後の植民地問題 8ページ
- (1)「ヴェルサイユ條約は, ……」
- (2)「不況克服の手段としては, ……」
- (3)「オッタワ會議に於ける協議の内容は

60) 前稿では「植民政策, 東亜經濟事情 昭和16年4月 9月」と表記したが訂正する。

……」

- (4) 「英國ブロックを成立せしめた基礎は、……」 9ページ
- (5) 「英國ブロックと並行して、モンロー主義以来の米國ブロックが完成に近づきつつあったが、……」
- (6) 「フランスも亦ブロックの結成に向かったが、……」
- (7) 「上述せる如き資源豊富なる諸国のブロック形成は、その他の諸国のための市場を益々狭隘ならしめ……」 10ページ
- (8) 「これらの諸説は、いづれも実現を見なかったが、……」

#### オ五節 歐洲の廣域經濟 11ページ

- (1) 「英帝国の指導による世界經濟は、……」
- (2) 「歐洲經濟の計畫化に於けるドイツの意図は、その封鎖化ではないが、まづオーにそのアウトアルキー化である。……」
- (3) 「歐洲の經濟圏に於ける新たなる生産諸力の配置は、必ずしも強制的な人工的組織の建設を意味せず、むしろ自然的條件を基礎として予定され、成育されるものである。……」
- (4) 「かゝる分業関係の中心に立つものは独逸である。……」 12ページ
- (5) 「かくして後、歐洲經濟圏の海外市場への進出が試みられる。……」

#### オ六節 東亜經濟圏の諸問題 14ページ

- (1) 「東亜に於ける廣域經濟の建設は、歐洲の廣域經濟と異り、なほ多く未来に属する問題である。……」
- (2) 「現在に於ける日本の食糧不足は、佛印及びタイからの輸入米によって補はれている。……」
- (3) 「支那の農村は家を構成分子とし、家長を家の中核とする。……」
- (4) 經濟の解体過程と王朝の交替、文 制

度 15ページ

この「植民政策、東亜經濟事情 昭和16年10月 12月」第三節には、(5) 「北米合衆国の独立は旧植民地制度の崩壊を意味する。……」とあるが、合邦（合同）/独立論についての言及はなく、スミスについては『国富論』出版年のみが記されている。タッカーの名はない。なお1940年6月20日に小林は大塚久雄の演習に出て、大塚から、タッカーに言及した黒田謙一『植民經濟論』<sup>61)</sup>を借りている。そして26日読了、30日「『植民經濟論』の清書」を終え、7月1日には「『植民經濟論』を大塚助教授に返却」している。

- vi) 1942年「經濟政策 (1) 昭和17年度 オ1学期」(計13ページ)

#### 經濟政策 政治經濟學原論

##### 序説

- 1) 「經濟政策に関する學問が何を対象とするものであるか……」 1ページ
- 2) 「このやうな理論の立場の変化は、結局実践に対する理論の無力といふ言葉で批判され……」 3ページ
- 3) 「しかるに、『理論』の據って立つ以上の立場は、近代ヨーロッパの精神の一つの主流ではあったが……」 6ページ
- 4) 「尚、理論經濟學がその批判に答へる積極的な抗辯に対しても亦 耳を傾けねばならない。……」 8ページ

#### オ一章 政治經濟學の潮流

##### オ一節 重商主義

- 1) 「近世国家の成立は、一方に於てはカトリック教的普遍主義からの独立を意味すると共に、他方に於ては封建的割

61) 黒田謙一再版『植民經濟論』弘文堂書房、1940年。福島大学附属図書館大塚久雄文庫に保管されている。

據主義の否定をも意味した。……」10ページ

- 2) 「さて、重商主義がいかなる性質のものであり、且つそれが後代の経済学に対していかなる意味を有してゐるかについては、十分に一致した見解がない。……」10ページ
- 3) 「それゆゑ、後代の国民経済を培ったものとしての重商主義は、所謂固有のマーカントリズムに於てではなしに、この毛織物工業を中心とする保護主義に求めねばならない。重商主義一般を厳しく否定した A. Smith の理論といへども、この重商主義の培った英国の国民経済の地盤の上にあつてはじめて可能だったのである。……」12ページ

vii) 1942年「経済政策(2) 昭和17年度 才2学期」(14ページから始まる、計32ページ)<sup>62)</sup>

## 第二節 アダム・スミス

- 1) 「Adam Smith は経済学の祖といはれるが、それはスミスが國富論に於て国民経済の機構と運行との総合的把握を企てたのみでなく、價格構成といふ核心を捉へることによって、この把握に成功したからである。……」14ページ
- 2) 「われわれはさきに、重商主義の本質を工業主義として知ったがゆゑに、スミスがこれを System of Commerce と呼んだことは誤りといはねばならない。……」16ページ
- 3) 「スミスの理論の性格は右のごとく述べられた。その理論は、市民社会に於ける生産力の理論だったのである。……」17ページ

附説「スミスの國富論が理論経済学の出発点とされながら、しかもそれが所謂單純合理的理論ではなくして直観的、実践的な性格を有してゐたことは、ここに見たごとくである。……」18ページ

20ページの左側ページにはフリードリッヒ・リストの年表が書いてある。

## 才三節 フリードリッヒ・リスト

- 1) 「Friedrich List (1789 1846) は、従来に於ては自由貿易に対する保護主義の主唱者として、或ひは古典学派に対する厂史学派の創始者として知られてゐたが、一層適切に云へば、リストはスミス以来の理論経済学に対する国民経済学或ひは政治経済学の建設者だったのであり、リストの持つかかる意味は最近に於ける所謂リスト・ルネッサンス以来特に注目されるてゐるところである。……」20ページ
- 2) 「まづ、『政治経済学の國民的体系』の示すリストの所説を顧みよう。……」
- 3) 「以上の如きリストの所説は、十分に重商主義的であり、リストはこの意味で新重商主義の一人に数へられる。……」24ページ
- 4) 「『政治経済学の國民的体系』(1841)の主張するところと、その有する意義の一半とは凡そ以上の如くである。……」26ページ
- 5) 「リストの主著に於ける関税政策の思想は、イギリス商品のヨーロッパ大陸への氾濫の対策として重商主義の擴充といふべきナポレオンの大陸封鎖(Kontinentalsystem)を再建することにあつた。……」29ページ
- 6) 「以上の如きリストの預言的立論は、当時のドイツの情況に於ては實現せらふべき性質のものではなかつた。……」31ページ

62) 「経済政策(2) 昭和17年度才2学期」を前稿では45ページと記載したが訂正する。

## 第二章 政治経済学の基礎構造

## 第一節 政策の目的 / 純粹理論と政策

1) 「われわれは既に序説に於て、純粹理論に対していかなる不満が抱かれてあるかを知り、理論、政策、厂史の分離がいかにその統一の回復を要求してあるかを知った。……理論、政策、厂史の三者が一つの理論 [原文ママ] として統一されねばならないことを知る。……」 34ページ

2) 「所謂価値判断論争は M. Weber の論説『社会科学的竝に社会政策的認識の客観性 (Die "Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis - Arch. f. Szw. u. Szp. 19. Bd. 1904 [原文ママ])<sup>63)</sup> によって開始せられた。……」 35ページ

3) 「ウェーバーによる価値自由の主張は、更に厂史学派に対しては次の如き積極的批判を行った。……」 36ページ

4) 「民族協同体の生活性の保障と進展とが、かうして經濟に於ける実践の目標として、ひとまづ客観的に措定されることとなった。……」 39ページ

## 第二節 厂史と政策 / 厂史的理論

1) 「われわれは既に、政策の目標が民族協同体の維持と發展とに存することを知った。……」 41ページ

2) 「ウェーバーの価値自由の主張は、もともと純粹理論の方法論的基礎として為されたものではなかった。……」 42ページ

3) 「經濟学が厂史科學であるといふことは、勿論それが經濟史と同一であることを意味しない。……」 43ページ

43ページの左側ページに「高山、世界史の理念 270 [原文ママ]<sup>64)</sup>とメモ書きがある。

4) 「価値判断論争の展開はわれわれを導いて客観的な価値判断の可能であることを教へた。即ち民族共同体の為の判断がこれである。……」 44ページ

45ページの左側ページに「難波田春夫批判<sup>65)</sup>とメモ書きがある。

以上が「小林昇文書」にある最後の講義ノートの「經濟政策 (2) 昭和17年度 第2学期」であり、この最終の45ページ末に日付がある。講義ノート7冊のうち日付があるのはこのノートだけである。小林は他の文章でも文末に終了日を付けていることから、この年の12月6日、つまり「第2学期」「10月 12月」の12月6日に記述を終えたことになる。

ここで、当時の各大学等での植民学担当者の一欄に小林が掲載されているので紹介したい。田中慎一「新渡戸稲造の朝鮮(韓国)観」に、「高等教育機関の<植民学>(1940年代)」という題で、担当者45名の学校名、授業科目名、授業時間数が表にまとめてある。「東京帝国大学 植民政策 週2時間 東畑精一」に始まり、表の最後の段が「福島高等商業学校 植民政策 小林昇」。そしてこの出典は「『拓殖論叢』第3巻第1号(財団法人日本拓殖協会, 1941年7月) 235-237頁の『大学専門学校移植民講座及研究団体一覧』による。ただし、福島高商は小林昇『帰還兵の散歩』(未来社, 1984年) 121・150頁による<sup>66)</sup>と注に説明がある。この論文の著者の田中は植民

64) 高山岩男『世界史の哲學』岩波書店, 1942年。小林昇文庫にはない。

65) 難波田春夫『国家と經濟』1-5巻, 日本評論社, 1938-1942年。小林昇文庫にはない。

66) 田中慎一「新渡戸稲造の朝鮮(韓国)観」『經濟学研究』54巻4号, 北海道大学, 2005年, 10ページ。

63) Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 19, Tübingen: J. C. B. Mohr, 1904 の略。

政策講座について小林にインタビューをしていた。

『柏祐賢著作集』第7巻月報(1986年7月)掲載の「剛直山系」の中で小林はこのインタビューについて次のように触れている、「先日、北大経済学部助教授の田中愼一さんがわざわざ来訪され、いまのお仕事に関係があるとかで戦争末期の植民政策講座のことをいろいろと聞きとって行かれた」<sup>67)</sup>と。さらに小林は、このインタビューの中で話した内容として、戦争末期に担当した植民政策講座について次のように語っている。戦争が全アジアを巻き込もうとしていた当時、新渡戸稲造、矢内原忠雄の植民学はすでに学界の中心ではなく、矢内原が東大経済学部を追われたあとに東畑精一が「臨時に農学部から来」<sup>68)</sup>て植民政策を兼担し「広域経済論といったものを研究対象とされていたようである。」<sup>69)</sup>そして、『山までの街』では、教を乞いに訪ねた小林に対して東畑は「『植民政策ってどういうものなのか、ぼくにはまだ……というか、本来というか、分からないんですよ』とホンネを吐いた」と記している<sup>70)</sup>。結局、小林も「ウェイクフィールド、シーリーなどの古典やロツシャー、ケブナーなどドイツのKolonialpolitikの教科書の勉強は早目に切り上げて、むしろ、新設の講座だった東亜経済論の方に力を入れ」<sup>71)</sup>たという。小林は1940年6月27日に東畑を東大経済学部の研究室に訪れ、「『米穀経済の研究』を一巻を戴く」と日記に記している。

今回、小林の戦時中の講義に関する資料を調べる中で、インタビューアの田中愼一から

次のような回答を得ることができた。「(1986年3月31日に小林先生にインタビューはおこなったが、)インタビューを引用、ないし、参考にした論文は、まだ発表されていない」、また小林はこのインタビューの中で、戦争末期に担当した植民政策講座について書く予定があると話していたということである。インタビューは3月末である、同年7月発行の「剛直山系」がそれであろうか。なお、田中は「剛直山系」のことを今回初めて知ったということである。

この「剛直山系」で小林は、柏祐賢の戦中戦後一貫した、それも敗戦直後に中国経済三部作を「時流を顧慮せずに堂々と」公刊したその研究姿勢を讃えている。「戦時下の中国研究が戦争のしもべ……不信の目でみられた」時代であった。小林は、戦時中に担当した植民政策講座が消滅したことで解放感を抱いたし、中国関係の本は闇米を買うために売り払ったという<sup>72)</sup>。その小林も生還直後すぐにリスト研究を再開し、柏の場合と同様に小林も敗戦直後の時流にさからって、リストに徹してやまなかった。「誰にしる戦後の学界のイデオロギー的昂揚を直接に知っている人なら、そのなかに戻って来てリストの研究に没頭したというような人間、しかもその研究をあえて公表したというような人間がありえたことをふしぎと思うであろう」と小林は記す<sup>73)</sup>。

では、戦時下の小林の講義は受講生の目にどう映っていたのだろうか。『著作集』8巻月報に渡辺源次郎の回想が掲載されている。昭和15(1940)年、渡辺が旧福島高商の二年生になった時、熊谷、小林が一教師として着任した。その翌年、渡辺は小林の講義の「確か一つは植民政策であったが、もう一つは選択科目としての経済学史」を受講している。

72) 「剛直山系」2-3ページ。

73) 小林昇「自編『経済学史著作集』の完結にあたって」『未来』未来社、1980年、6ページ。  
『帰還兵の散歩』に再録。

67) 小林昇「剛直山系」『柏祐賢著作集』7巻月報、京都産業大学出版会、1986年7月、1ページ。

68) 『山までの街』7ページ。

69) 「剛直山系」1ページ。

70) 『山までの街』8ページ。

71) 「剛直山系」1ページ。

また、急な休講の際には他の先生が急きょ穴埋めをさせられることもあり「小林先生がハンス・グリムの『土地なき民』について紹介されたこともあった<sup>74)</sup>」という。また、小林は日記に「補習時間」でカロッサの話をしたと1941年10月25日に記している。カロッサの詩は小説「花蓮」にも書き留められており、先述の1964年ウィーン訪問の折に小林はハンス・カロッサゆかりの町パッサウを訪れている<sup>75)</sup>。出征直前小林は「花蓮」の執筆に集中したという。この「花蓮」についてはのちに触れることにしよう。

グリムの『土地なき民』は1926年に出版され、日本では星野愼一訳<sup>76)</sup>が1940年12月から1941年12月にかけて出版されている。小林も第3巻を1941年10月29日に読み、第4巻を12月末に買い求め翌日読み終え、「Nationalsozialismusのやむにやまれざることここに明らかにしるされたり」と日記に感想を添えている。

小林は『著作集』6巻464ページで、グリムとバルザック、ケラーを並べて、これらの文学作品の引用は「リスト農地制度の分析」の「論説自体の一特質といいうるであろう(ついでにいえば、わたくしはフランスの原始蓄積の高潮期を、バルザックの『人間喜劇』の経済史的新編成によってもっとも鮮明に描きうるであろうと考えている)」と記している。では、グリムの文学作品『土地なき民』を小林はどのように扱っているのだろうか。小林は戦後論文である「リスト農地制度の分析」において、「『農業に対する国家の配慮』という、近代ドイツの新しい課題の必要と、

その積極的評価とが生れて来る。しかしこのことは、裏返しをすれば、資本の攻勢に対して没落を防ごうとする中・小農民の、土地と血とへの執着にもとづく、国家(国民)主義的意識の強調ということである。……ゲルマン民族の使命感は、かかる意識を培うのに最も役立つであろう」、「デモクラート・リストは、……みずからはからずのちのナチズムの思想を培いつつあったのではなからうか」という。この本文には、「ナチス文学の代表作『土地なき民』が注として付けられている<sup>77)</sup>。また小林は、リスト『全集』の編纂(1927-1935)と同時期に、「1926年にハンス・グリムの小説『土地なき民』が公刊され、1933年にヒトラーが首相となり、翌34年に彼が総統となったことを書きそえておきたい」ともいい、メーザー、リスト『農地制度論』、ゲオルク・ハンセン、「さらに、ハンス・グリムの文学作品『土地なき民』(Volk ohne Raum, 1926)をも合流させつつナチス政権の農相ダレーの『血と土』の思想にいたる潮流の存在が推測されるという事実」を指摘しておきたいと記した<sup>78)</sup>。

### (3) 研究と創作と

小林は、経済学史の第1論文「重商主義の解釈に就いて」を1941年に執筆している(発表は1942年1月)。8月14日にプランを作り、「花蓮」の推敲と並行すべしと日記に記されている。翌日から執筆を始め、10月9日「草稿やうやく終る」、10月26日「論文の稿をやうやく了ふるを得たり」、翌日「書上げし論文を熊谷に示」した。そして、第2論文の「広域経済圏の成立と植民学」は1942年4月に依頼があり、「強じて草せり」と1か月間で書き上げている。その間、創作「雲浮ぶ」<sup>79)</sup>

74) 渡辺源次郎「私の『小林先生』」『著作集』8巻月報、1979年。

75) 「ドーブシュ=パツェルト文庫のこと」26ページ。

76) ハンス・グリム『土地なき民』、星野愼一訳 1-4巻、鱒書房、1940年12月-1941年12月。星野愼一巻は小林昇文庫に収蔵されている。

77) 『著作集』6巻、326-327ページ。

78) 『著作集』7巻、59ページ、128ページ。

79) 同人誌『狼煙』8号の目次では「雲浮ぶ」と記載され、その他では「雲浮ぶ」と記されている。

を「漸く」書き上げ、また「福島高商の図書室」<sup>80)</sup>の文献購入のために上京するなど多忙を極めている。そして、論文執筆の依頼が1944年2月23日に来る。小林はさらにリストに没頭し、「リストの農業政策論」の構想を続け、「その終説たる『リストの植民論』」を5月号に載せるために準備を続け、3月23日に書き始めて31日に清書を終了、4月1日には原稿を発送した。それが戦時下最後の論文となった「フリードリッヒ・リストの植民論」(『国際経済研究』5巻5号、1944年)である。また、この4月4日始業式に「経済統制論の講義」を開始しているが、「経済統制論」講義ノートは「小林昇文書」にはない。1944年7月、小林は召集される。

「小林昇文書」にある創作ノートの中に、1941年4月5日に書き始めた「遠征以前」<sup>81)</sup>がある。題の下にカロッサの詩を寄せている。また、同年5月31日に短編「花蓮」を起稿し7月2日に「やうやく了す」、8月12日花蓮を推敲している。同年11月末「改稿『花蓮』の稿を起こす。しばらくここに集中せんとす。」「花蓮」が不成功ならば今の自分は耐え難いとも記している。1941年12月16日「『花蓮』やうやく終ふ。七十六枚なり。」「狼煙」9号(1942年3月)掲載の「花蓮」は「遠征以前」との共通点が多い。召集を目前にして、自分の本意の「仕事」を整理して残したいとする思い、それが歌稿の清書、創作、研究へと小林を没頭させた。昭和16(1941)年12月31日、「本年の仕事」論文1、評論1、創作2、短歌約130。「わが身邊は平穩に過ぎたりと云は

む」と日記に書き留めている。

この「花蓮」を掲載した『狼煙』9号の編集後記に小林は次のように書いている。「『狼煙』の同人はまだみんな二十代である。……遠慮なしに云はせてもらえば、戦争を自己の必然としては考へなかつた三十代四十代の所謂知識人の考え方、感じ方、さらに生活のしかたが、ピッタリと納得出来にくかつた。」そんな「人々は、もうどうでもいいやうな気がした。こんな人々がまた逞しさといふ言葉を使つたものだが、その言葉から投機師のやうな文學者を生んでしまつた。ノ誠實といふ言葉も亦容易には使へぬものであることを、同じ時代の経験が教へた。」<sup>82)</sup>この時小林25歳、「花蓮」の前身と思われる「遠征以前」の最初の題は「稔らぬ世代」であつた。

「詩人は狼煙をあげるものとしてのみ確信をもつ」、この言葉から『狼煙』は始まつた。同人誌の主宰者である増田晃「合歡」の一行目である。『狼煙』(ローエン)は戦時下に生きた若者たちの心情を記録し、増田は出征後も中国の戦線から『狼煙』に寄稿し続けていた。1943年11月、増田の追悼号が組まれる。その『狼煙』13号に小林は小説「春の鶉」を掲載した。「小林昇文書」に「春の鶉」のノートが残っている。また「春の鶉」は、増田の遺族である鈴木利子の著『生き残りの記：「嫁菜の記」その後』(2007年)にその一部が転載されている。同書には「増田晃の唯一の友人であり、同志であつた小林昇さん」と記され、小林の手紙も載っている<sup>83)</sup>。そして、小林は、増田が中国の戦線から小林に宛てて

る。

80) 『山までの街』24ページ。

81) ノートの表記を、ノートの表紙に書かれている題「遠征以前」に訂正する。前稿では「長編『遠征以前』の覚書」と日記中の表記を使用した。また、このカロッサの従軍作品『ルーマニア日記』のなかの詩は、『山までの街』49-50ページに掲載されている。

82) 「編輯後記に代へて」『狼煙』9号、1942年3月、71ページ。文末に「二月一日小林私記」とある。『狼煙』全15号(1939-1944年)は「小林昇文書」に保管された。

83) 鈴木利子『生き残りの記：「嫁菜の記」その後』講談社出版サービスセンター、2007年、61-78ページ、33-34ページ。戦死した増田晃の著作は遺族が出版し、小林昇文庫にも収容された。

送ったハガキ<sup>85</sup>枚をずっと保管していたという。「増田の全詩集を編みたいという希望を、いまでも捨てきれないからなんです。そういう責務を私は背負っているのです。」<sup>84</sup> 小林の2007年の言葉である。

さらに、「応召を待つ青年としての日々の思念や、ごく最近に未来社から出た佐藤清<sup>85</sup>著『画文集シベリア虜囚記』に描かれたような事実も」、戦争「経験にまじってくるのである」と語る<sup>86</sup>小林は、「異国の人民とのあいだの連帯にそそがれる、この画文集の作者の目は、このような痛みに洗われたのちに新たな連帯の衝迫を内部に感じつつある、表現者の目である。そこには、自国と他国とを問はぬ、無数の無告の人民たちの横死の姿が映っている」<sup>87</sup>と、佐藤の著書に序文を寄せた。小林と佐藤の「われわれの両家族は、……戦争の末期と戦後の窮乏期とをつうじて、痛ましい共感のもとに協力し合った」と小林はいう<sup>88</sup>。その佐藤は、小林が出征した1944年に9歳年下、18歳で出征した。佐藤の兄は一橋から学徒出陣していた、小林の福島高商での教え子である。

上述のように飯沼は、「思想と、それを生み出した社会との関係……さらには、そのような思想を生み出した人間そのものが追求されている」と小林を評した。小林はなぜリス

トに徹し、リストの思考に迫れたのだろうか。時代考証抜きに推測することはできない。

「敗戦までの日本の『自作農創設・維持』満洲開拓農民の実行」と「リストの農地改革論（前近代的零細農民を近代的独立農民にしようとする改革、それが必要とするバルカン地域への農業移民、の提唱）」とが「いかに相似していたか……わたくしのリストは、日本でのこういう世代のなかに生きた一研究者が『見た』リストであった。ただむろん日本のばあいには、古い農本主義と虚しい精神主義とがそこに結合しており……『農地制度』論からリストの意図とは別にやがてゲオルク・ハンセン（Georg Hanssen） ナチスのダレー（Darré）への道を感じたとなわたくしが思ったことは、右の理由からだったのである」と小林は語った<sup>89</sup>。そして、小林はリストを、「後進資本主義国という宿命」<sup>90</sup>と後付けの説明で終わらせることはできなかった。後進国が抵抗のためにやむにやまれぬ攻防をする、リストはその体现者であった。

戦時下の小林はリストをまず内在的に、のちには客観的あるいは批判的に分析できたのは、二十代を晩年とした体験が小林に深く刻まれていたからではないだろうか。「経済学自身としては、技術主義とイデオロギーとの両面からの離脱がいちばん必要であろう。青春の錯迷が養いとなって、おのずからそれを実践してきたことが、40年近くなったわたくしの研究歴に示されているかもしれない」<sup>91</sup>、小林の述懐である。

最後に小林の言葉を引いて本稿を閉じたい。「御多分にもれず文学青年でしたが、戦時中でしたので夢は持てませんでした。ノマイにち死と直面して暮らすというのはじつに奇怪

84) 『先学訪問 小林昇編～21世紀のみなさんへ～08』50ページ。

85) 佐藤清「補充兵と経済学：小林昇全歌集『歴世』に寄せて」服部正治・竹本洋編『回想 小林昇』日本経済評論社、2011年。小林の人文系の蔵書の多くは佐藤が設計した書庫に収容されている。佐藤清氏はこの8月に急逝された。

86) 「自編『経済学史著作集』の完結にあたって」6ページ。

87) 佐藤清『シベリア虜囚記：画文集』未来社、1979年、7ページ。

88) 同上6ページ。また、佐藤の著書は小林昇文庫に収容されている。

89) 「『東西リスト論争』新考」93ページ。

90) 『著作集』6巻、272ページ。

91) 「＜大特集＞78年版 経済のすすめ」206ページ。

なものです。そういう異常な生活のなかに真実は見いだされない、日常性をこそ大切にすべきだということが、そのごだんだん分ってきました。」<sup>92)</sup>

付記：前稿の記述に以下のように訂正と追加をする。

1) 前稿では「『朝降る灰』の原稿用紙の稿と活字原稿とがある。」と記載したが、『朝降る灰』は原稿用紙の稿と、『歴世 小林昇全歌集』(不識書院、2006年)の「朝降る灰」のゲラがある、と訂正する。

2) 前稿では「講演録音テープ・小林ノ杉山 対談、1月16日」と表記したが、「対談・ヨーロッパと近代 文学と経済の間(上)」「評論」50号、1984年、6 20ページ、「対談・ヨーロッパと近代 文学と経済の間(下)」51号、1984年、8 20ページ、と訂正する。講演録音テープは「対談・ヨーロッパと近代 文学と経済の間(下)」の20ページの半ばで

終わっており、同稿はテープの録音に加筆修正がされている。さらに、『評論』の稿に加筆修正をして、小林昇・杉山忠平『西洋から西欧へ』日本経済評論社、1987年に再録された。

以下は追加。

3) 研究ノート：「リスト受容の50年 [原文ママ] / 1997. 10. 29 / 於慶応大学」と書かれたB5版大学ノート。1ページ目に「『半世紀のリスト受容』 / これが正式題名」と記している。このノートは「半世紀のリスト受容材料」と書いた封筒に入れられ、文献リスト、目録カード、メモが同封してある。この文献リストは小林論文「半世紀のリスト受容」<sup>93)</sup>の「文献」と一致する。ノートの端にはラベルが貼られ、山田分析、高島、高島、大河内ノスミスとリスト、高島、板垣方法、板垣新版、大塚序説、大塚国民経済、松田 Zollverein、松田近代社会の形成、富永、大塚金之助、大内力、住谷とラベルに書かれている。

4) 研究ノート：「Cantillon, Turgot, Stuart, 田村信一『グスタフ・シュモラー研究』, Stuartの利子論」, B5版大学ノート。

5) 研究ノート：「『東西リスト論争』補遺(控)」, は「『東西リスト論争』新考」のノート。おもに3部構成で、「Plan」計5ページ、「稿」計3ページ、そして「Tübingen Schloßへの出席者」, 「リスト生誕200年, Reutlingen」, 「小林著作集 p. 38, XI p. 229におけるSalinの手紙(小林宛1971. 5. 17)」などの計11ページ。この「稿」の最初に「小林のFr. List」と見出しが書いてあり、その下に小林のリスト論文(1943年から1952年まで)の表と、「✓小林のリストは戦前か戦後か?

92) Scrap bookに貼ってあるこの切り抜きには「『野村学芸財団会報』1972年(第8号)」と加筆してある、41ページ。現在の仕事につくキッカケ、当時の専攻、興味や「夢」と現在の仕事とのつながりは、という問に対しての小林の答が本文に引用した言葉である。また、第一問「先生方のお若い頃 私達奨学生と同年代の頃のことについて、お話をください」という質問に対しての小林の答えは「なにしろ戦時中で、いろいろ悩みが多く、身を入れて勉強もできませんでした。ノ必死に生きたヴェトナムでの二年間が、私の遅い青春だったかも知れません。」次の、若い頃に読んで感銘を受けた本はという問には、「ドストエフスキーと鷗外でしょう。それに柳宗悦」と答えている。このアンケートはScrap book 5冊のうちの第1冊目にあり、その1冊目最初の記事である、大塚久雄「如何せん寂寥の感：質實にして優れた研究を切望」(「17・9・25」と加筆されている。おそらくは『帝国大学新聞』の切り抜き)から、最後は小林昇「大須賀総長の責任」(『平和と民主主義を守るノ立大実行委員会ニュース』44号、1969年12月)の記事までが保存されている。

93) 小林昇「半世紀のリスト受容」中村勝己編『受容と変容 日本近代の経済と思想』みすず書房、1989年。

の問題」と書かれている。

6) 小林自身の抜刷を収容したクリアファイル2冊について紹介する。『著作集』10, 11巻に再録する予定の抜刷を収容したものとされる。クリアファイルの中の抜刷の順番は『著作集』の論文の順序とは異なる。小林の書評「難波田春夫/国家と経済 第一巻 第四巻」『福島高商商学論集』14巻1号, 1942年はクリアファイルの最初にあり、また「剛直山系」『柏祐賢著作集』7巻月報なども入っている。『著作集』1-9巻に関しては、編集作業用ファイルのような資料は「小林昇文書」にはない。

また、小林自身の抜刷や雑誌記事などに加筆修正がされたものがある。著書に再録する際に書き入れたものであるのか、著書では修正されている。他には、小林の抜刷を収容したクリアファイルや、小林の著書への書評と書簡が保管されたもの、寄贈された抜刷、贈られた資料と書簡などを収容したクリアファ

イルがある。また、クリアファイルに入っていない抜刷や論稿、寄贈された抜刷、資料、書簡などは数多くある。

資料の調査にご協力いただいた田中愼一北海道大学名誉教授に大変お世話になった。そして、大森郁夫早稲田大学教授、竹本洋関西学院大学名誉教授にご教示をいただいた。また小林純立教大学教授にはゲーリンク、ゾンマーなどの書簡の確認に関してご教示をいただいた。北海道大学附属図書館資料調査担当の方、立教大学図書館の方々にご助力をいただいた。最後に、ご遺族である松本句子さんから小林昇先生についてのお話を伺えたことが、本稿作成に力を与えてくれた。記して感謝の意を表したい。

本稿は立教大学経済研究所「小林昇文書整理プロジェクト」の研究成果の一部である。なお本稿の作成は、荒の草稿を服部が監修するかたちで行われた。